

史料室だより No.32

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1989年3月31日

特集：幼稚園とともに

母校幼稚園に勤続12年間の回想

第1部 戦時中

(東洋英和女学院 附属幼稚園閉鎖)
(東洋永和女学院 戦時保育所開設)

第1部 戦時中

思い起こせば昭和18年4月(何日か前に師範科を卒業したばかりの私は)東洋英和女学校附属幼稚園の若い先生になりました。

年長組(ハト)は主任福島寿美江先生の受持。

年少組(ウグイス)は倉長美枝子先生の受持。

年少組(ヒヨコ)は高橋千恵子の受持。

入園式は、新入園児とおなじ気持ちで、私も大層緊張致しました。

主任の福島先生は、どのような時にも静かなお声で子供たちにお話をなさいました。皆手をおひぎに背すじをのばして行儀よくお話を聴きました。

倉長美枝子先生はピアノを大層美しく弾かれて楽譜もピアノの鍵もご覧にならずに、いつも子供たちの様子を観察なさりながら、福島先生の司会の表情から、次に何の歌を考えていらっしゃるのかすぐに察せられました。

私の保育室は、主任福

元幼稚園主任 宮崎 千恵子

島先生の組の隣りででしたから毎日先生の優しくきびしい視線に守られ無事に毎日を暮らすことが出来ました。子供たちの純真な言葉に勇気づけられ、歳月はたちました。子供たちの動きをみる心のゆとりはまだまだ至難のことでしたが、私は現場に立って尊いものを会得致しました。神様からおあずかりした大切な幼児は、私には教師でもありませんでした。

昭和19年初夏、いよいよ大太平洋戦争の暗雲濃くなり、在籍幼稚園児の家庭は、地方に疎開なさる方が日毎に増してきました。心のひきしまるこ



昭和19年3月卒園児

右から、福島先生、倉長先生、宮崎(旧高橋)先生、同年夏をもって幼稚園閉鎖(当時大東亜戦争中)

の夏、或る日の午後、お役所の視察団が幼稚園に訪れました。

若輩の立場にありました当時の私には、その時のいきさつは、詳しく聞かされては居りませんでした。その日以来、何とはなしに、主任の福島先生の身边には淋しいご様子を感じられて参りました。勿論先生は何もおっしゃいませんでした。

夏も終りに近い或る日、福島先生は、幼稚園とご自分の身の整理をなさったあと、私共に、退職をなさる決心を語られました。

「幼稚園は閉鎖されました。これからは、戦時保育所にきりかわります。私には体力的に無理だと思いました。高橋さんは若いから残って働いて下さい。」とおっしゃいました。

倉長美枝子先生は、幼い民子ちゃんのお母様でいらっしやいましたので、空襲をさけて疎開なさることになりました。倉長先生母子様の御無事を祈りました。生涯の大半を保育に捧げられた福島先生のご心境を拝察、言葉もありませんでした。お世話になったお二方の恩師に尽きせぬなつかしさ、お名残り惜しさに涙して「戦時下お互いに、命あらば再会を、」祈りつつお別れ致しました。

戦時保育所開設迄の2か月余、私は品川の沖電機に、高等女学校学徒勤労動員学生の監督助手として、連日赴くようにと、安井てつ先生のご配慮をいただきました。鶴沼先生、水木先生、加々美先生にご指導いただきまして、女学生と共に勤労作業に励みました。

昭和19年11月いよいよ戦時保育所が開かれました。私は再び、なつかしい建物に帰ることが出来ました。師範科は保姆養成所と改名され主任切刀嘉子先生の御指導のもとに、私と実習生3名、寺尾さん、鎗さん、服部さんにて保育を致しました。子供たちは以前の幼稚園児2名のみ残り、あとは三河台、飯倉付近のお店屋さんの疎開出来な

かった子供達が防空頭布を肩から下げて殆ど下駄ばきもんぺ姿で、皆目を輝やかせて登所して来ました。冬の寒空にはあの建物は勿論戦時下暖房設備もなく、20名足らずの子供達はとても寒かった筈です。「お首を亀の子のようにちぢめるとかえって寒くなりますよ。」「両方の手をあわせると両方から暖かいものが出て来ますよ。」と教えたものです。子供讚美歌の中でイエス様を神さまと改めて教えました。お祈りもつづけていたことを覚えて居ります。私は自然に子供たちと朝の礼拝を守りましたが、今あらためて時局を痛感致す次第です。

この原稿を私は一息にここ迄書いて、前記実習生の寺尾さん(現在市川さん)の消息を探し当て、電話をかけることに致しました。40年ぶりの声の再会に感慨も新たな2人の会話を記憶のメモに残すことに致しましょう。

寺尾「子供達のお母さんは、おべんとうを懸命につくってもたせたものですね。」

私「食糧事情の乏しい時でしたからどんなにか苦心されたことでしょう。」

寺尾「子供たちはもんぺでしたけれど、いつもキチントしていましたね。」

私「寺尾さんには、毎朝お火鉢に少しの炭をおこしていただきましたね。」

寺尾「ハイ、廊下の突当りの所にたしか、お炭のよいのがありました。当時は家庭には無い時でした。」

私「そうでした。福島先生が、前の幼稚園の時使った炭を残しておいて下さったのです。」

寺尾「私は、この戦時保育所の実習で覚えたことは、あとで、役に立ちました。来ていた子供が当時は、どんなに少くとも、戦時中でも、旧幼稚園の建物のおそうじは、本当によくしましたね。高橋先生といっしょに、モップで、

前年秋に戦時保育所開設。付近の疎開出来なかった幼児とともに。右から、実習生の寺尾さんと服部さん、保母高橋先生、所長功刀先生、実習生の鐺木さん、見学生3人。



昭和20年3月 早目の修了式

行ったり来たりして、ゆかの細長い板のはり目にそって、キッチリと丁寧に拭きました。なつかしいです。」

寺尾さんとの電話を終え、当時の私の記憶の確認ともなりました。再び原稿を続けます。

実習生が1週間の内、何日か午後は学校に戻った或る日のことだったと思います。私が1人で、子供のお昼寝を見守っていた時、突如、警戒警報発令のサイレンが鳴り渡りました。子供たちはすぐに目を覚まして、枕にしていた防空頭布をすばやくかぶり私の傍に集まりました。私は両手を思い切り広げて、うずくまる子供達を抱きかかえました。人数が少ないので私の腕の中に充分入ることが出来ました。子供達は私を絶対に信頼していたのでしょう。誰も一言も言わずに黙っていました。

当時、保育園は警報発令下、父兄は近所ゆえ、迎えに来ましたから、それ迄の僅かの間でしたが、無事に1人ずつ帰って行く時間は、私にはそれは長く思われました。幸いなことに警報は昼間、2度ですみました。(私自身、毎朝自宅を出る時には、母に無言で別れを告げて居りました。)

昭和20年3月半ばを待たずして、早目の修了式を行いました。夫々の子供に、画用紙の上

(何か月修了。)と書いて証書と致しました。この先、空襲下、どうやって身を守るのでしょ。実習生3人と私は一人一人の思い出を書いて可愛い画を添えてあげました。(皆、証書などを、大切そうにかかえています。)

昭和20年3月10日、夜半の帝都空襲がありました。この子供達の家は殆ど全部焼失してしまいました。東洋英和戦時保育所の建物は無事に残っていました。下駄箱に残っていた上ばきと保育室の引出しにあったクレヨンと画帖などを持って子供たちの家の焼跡を訪ねてみました。僅か2軒の家族の他、全部の子供の立ちのき先もわかりませんでした。とうとう戦時保育所もこれで出来なくなりました。

たった5か月のことでしたが思い出は濃く、霜やけの手の甲のこんもりとしていた、タッチャン、どうしているかしら。タッチャンには、絹江チャンという8才位の小さいお姉さんがいました。細面のやせた体に、いつも小さい男の赤ちゃんを、^{おんぶ}背負っていました。病気で、お母さんは亡くなったので、絹江チャンが弟達の面倒をよくみていました。ご飯の仕度やあと片付けを一生懸命にしたらタッチャンの迎えに来ていました。時々、早

く来ては、建物の中に入って待っていました。いつのまにかおまごごとをしていたことがありました。その姿は少し遠慮がちに見えました。私は絹江ちゃんのその様子が可哀想でしたから、そのまま皆の中であそばせておきました。明日にでも空襲があるかわからないその時代でした。一瞬の平和に、おまごごとを楽しむ子供達の姿を見て私は涙を浮かべました。八百屋のエッチャン、ミエコちゃん。魚屋のケンちゃんのお父さんは出征中でした。おつとめのお父さんと優しいお母さんに守られていた信夫ちゃんとアキ子ちゃん、背の高い勇ちゃん、警防団員の息子の影山君、今頃何処に避難しているのでしょう。皆無事でいて下さい。私は焼跡に立って祈りつづけました。

戦時保育所の残務整理のあと、毎日保育所の子供なしの通勤をして待機致しました。東洋英和の母校から離れたくありませんでした。保育所はもう無くても、あの子供達の遊んだ部屋のゆかを磨きました。

昭和20年5月25日暁の大空襲は絶する恐ろしさでした。私の家も全焼しました。家のあった渋谷美竹町は一面の火の海、母と姉と私は手を取り合い励ましつつ逃げました。



昭和18年秋 運動会出場「仰げ仰げ」
円左上で右手をあげているのが奉職されて間もない高橋先生。(旧中高校校庭)

梨元官邸内にて助けられ危く命を落さずにすみました。私の前の家筈町は強制疎開の為家屋を取りこわされて此処に転居、地理不案内がかえって知らずに逃げたこの広い邸内の為助かりました。翌朝、母を姉に頼み、前夜防火用水の水をかぶって逃げたままびしょ濡れのもんべを着て足袋はだしのまま、ひたすら渋谷から青山の通りを歩き霞町、六本木を黙々と歩き続けました。何もかも焼け落ち、がれきの山、焼け野原には電線は危く垂れ下がり、まだ其処此処に残り火のくすぶり、お炭のようになった方々が横たわり、私は手を合わせました。どれ程歩いたことでしょう。ようやく六本木へ辿りつきました。この地より三河台方面は一望のもとに焼野原でした。その時の心境は文章に現わすことが出来ません。落胆と空虚であったと思います。歩いて辿りついた目の前に、なつかしい幼稚園の建物がくっきりと浮び、あの薄茶色の外壁、赤い屋根がそのまま残っていました。幼稚園のお二階に住んでいらっしやった功刀先生、光明先生の必死の防火、水をかけ火の子をはらいこの建物を守って下さったおかげだと思います。(当時、軍隊が幼稚園舎を使用していた事を後日聞きました。)

私は、再度母校永和で働く場所を失いました。

初老の母に励まされて、戦死した私の父の縁故を頼み、豊岡陸軍航空士官学校の子供員となり働きしました。昼間は度々空襲警報が鳴り主に小型機の機関銃掃射を浴びて、出陣前の若い士官が命を失われたことを聞きました。昭和20年8月15日、正午、終戦の御詔勅をラヂオで拝聴致しました。残務整理を完了して、私も、女子職員として復員という形で、この士官学校の働きを終結致しました。

翌年昭和21年に、ようやく、東京に転入が出来るようになりました。現在の支所ですが麻布区役所総務課に

勤務しながら、東洋英和幼稚園の再開を心に待ちつづけました。

此の年の6月上旬頃と思います。或る日、小学校の外崎校長先生が区役所総務課に訪ねられて、「高橋先生、愈々幼稚園が再開しますよ。もう一

度、帰っていらっしゃい。待ってますからね。」と励まして下さいました。この時の感激は、言葉に言い現わすことが出来ません。区役所の廊下の隅で、人知れずに涙を流しました。

(昭和18年幼稚園師範科卒 旧姓 高橋)

子どもに焦点を合わせて

30数年前の幼稚園の姿

元幼稚園主任 黒田成子

はじめに

1955(昭和30)年4月より幼稚園主任を短期大学の勤務をしながら兼任するようになると、突然の院長命令を受けた時は驚きであった。結婚で退職された宮崎(旧姓高橋)千恵子先生のあと、名門幼稚園ときいただけでも気が重かった。この時より1961(昭和36)年3月まで責任をとった間のことを記すこととなったが、30年以上も前のことなので、なるべく記録により正確なものとしたいが、不十分のところはお許し願いたい。

遊びに見られる時代背景

テレビが開始した頃であった。教師宅にはテレビや電話が無かったが園児の家庭にはこれらがほとんどあった。すもうや野球を見てきてはクラスの話し合いにも若三杉、若ノ花、琴ヶ浜等の名前がとび出し、ごっこ遊びにまで発展した。月光仮面や西部劇の話題も多かった。

こどもの姿

ホールの奥まった所に積木の部屋というのがあった。そこには著名なヒル氏の積木やあらゆる種類の積木があり、それらを取り出してホールで遊べるようになっていた。棚の上にはフレーベルの恩物がほこりまみれになって幾箱も整然と並んで

いた。私は顧問の短大のジュティーン先生と共にためらわず恩物を棚からおろした。子どもたちはこの珍しい小さい積木をままごとやいろいろのものにつかって遊んだが長続きしなかった。

園児は男、女、80名で女兒が約三分の二であった。4才と5才の組が2組ずつあった。長野彌園長以下教諭5名が保育をした。朝は自由遊びで始まり、その後礼拝、話し合い、それから日によって絵画製作、リズムの活動があった。子どもたちは歌をうたったり、ピアノに合わせてリズムをするのが大好きであった。話し合い、グループ活動等当時としては珍しく、これらを見にくる見学者もかなりあった。

個人観察記録をつける

まず子どものありのままの姿を理解しようとして「子どもにフォーカス(焦点)を!」という合いことばで子どもの個人観察記録をつけた。はじめの頃は不慣れで眼の疲労をおぼえるばかりであったが、次第に観察の着眼点をうまく捉えることができるようになった。又行動のチェック・リスト等もつけた。そして客観的な資料を累積していくうちに一人ひとりの特有な傾向が表われ理解へ

の糸口が見出せるようになった。(「幼児の教育」昭33年1~2月号にこれらの様子が出ている。) 教師会では子どもについての話し合いがもっとも重要な事項であった。後に短期大学の山内茂講師から知能テストの指導も受けさらに研修した。

カリキュラムについて

当時文部省から幼稚園教育要領が昭和31年に出たばかりで、いわゆる6領域が注目されていた。私達も単元の計画をたてる時一応は健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六つの領域を意識してたてたものである。しかし年間カリキュラムの目標を考えると東洋英和幼稚園の子どもにもっとも必要な保育を考えてこれを心がけるようにした。すなわち第1はキリスト教教育であった。第2は「自立」すること。第3は集団生活の中で友達と協調することであった。

一人降園を始める

高い競争率をくぐり、裕福な家庭の大きい保護と期待を受けながら、毎日かなりの遠距離から送迎されてくる子どもが多かった。愛らしい子ども達がどのようにたくましくなることができるのだ



昭和31年 有栖川公園へ見学に行った
帰り六本木の建物などを見学している。

うか。これが教師達の課題であった。

ひとつの試みとして徒歩で降園することを奨励した。地域の子どもは当然のことながら遠距離から来る子どもと家庭にとっては一大事であった。始めは同じ方面の子どもたちを教師が電車やバスのところまで連れて行き、家族の方が下車地点で待つという段どりであった。賛成しかねる保護者もあり、おばあちゃんまが子どもの後からそとつけて行くということもあった。帰宅後もお手伝いさんのような大人とではなく、同年令の子どもと遊ぶことの必要性をくりかえし話した。子ども達は降園後も友達の家へバス等を利用して遊びに行くようになった。もっともこれは幼児誘拐事件のまだなかった頃のことである。

キリスト教教育

子ども達には神様に従った人々の話やイエスさまのことを話した。月曜日の合同礼拝ではその週の聖句について話し、週日には遊びの中でもおぼえた聖句がきこえてきたりした。1956(昭31)年度から幼稚園でしていた日曜学校を廃し、各地域の教会学校に紹介し受け入れて頂いた。(「敬和会」第50号参照)

生活習慣を身につける

衣服の着脱を一人ひとりが思う存分してみる時間をとったり又掃除なども経験させた。当時幼稚園で園児がガラス拭きや床ふきをしている姿は奇異に感じられただろう。しかし皆は楽しんでた。

「昨日ガラスに星を描く相談になっていたが今日はガラスが汚れている事があるグループが発見。急にガラス拭きをする事になった。星をかくのは明日にして今日はガラスの拭き方について話し合った後全員で拭いた。」(1957. 7. 8 保育日誌から)

積極的にものごとにとりくむ

前記のガラス拭きは一学期の終りに年長組が話

し合ってお別れパーティをすることになった頃のことである。保育室や二階もきれいに飾りつけナブキンを作ったり、お茶の用意にもとびまわっていた当時の子ども達の姿が今でも忘れられない。

単元活動を柔軟に扱う

保育案のためには戦後米国から移入された単元による方法が一般化されていた。しかし英和幼稚園では教師の一方的な考えで単元を子どもに与えたりしないで子どもの実態をよく見てテーマを選んだ。又テーマにそった作品やリズムを課したりせず、内容や期間等も必要に応じて変更することもしばしばであった。

1958(昭和33)年1月26日から始まった白ねずみの単元の時など子ども達が一生けんめい飼育していた白ねずみから9匹の赤ちゃんねずみが生まれた時は当然単元の期間を延長し、次の「道ぶしん」の単元と並行して活動が展開された。子ども達の創造性とやる気には教師達までが刺激され、さらに保育への意欲をかりたてられたものである。

クリスマスや卒業式等の行事は特別な練習をするのでなく、日常の活動の様子が表われるような劇遊びやリズム・ブレイがなされた。又小学部の運動会に参加した時など子ども達が木工製作で作ったワゴンをリレーにつかったりした。

両親と共に

春の遠足は保護者と共にICUの広いグランドに行ったり国府津へ地引網を引きに出かけたりしたが、秋は園児達を主とした。1956(昭和31)年に始めて農業大学へ芋堀りに行った時はかなり批判の声もきかれた。が、たとえ土で汚れても子ども達が生き生きとした経験を楽しんできた事で理解していただいた。都電で小石川の植物園へ行った時も楽しい思い出である。

(1958(昭33)年11月9日東京大学の三木



昭和31年 小学部の運動会に参加して子どもたちが木工で作ったワゴンで人形をのせてリレー競走をしている。

安正教授を講師として迎え、始めて父母の講演会を開いた。母親だけでよいとの意見もあったが何組かのカップルも出席し盛会となり、以後恒例となった。

現代から見れば当りまえのことが戦後10年を経た当時はまさに変革の過程にあった時代である。この時に幼稚園も新しい歩みをふみ出した時期となった。東洋英和の長い歴史の中では短い数年間ではあったが長野彌園長をはじめ多くの方々を支えられたことは心から感謝である。

史料室日誌から

1988.3.17 ・倭文しづはた(静岡英和) "終刊号" 届く。

4.21 ・朽木先生より、静岡英和の松縄氏よりの調査依頼について電話あり。Q1-東洋英和卒山路たね子さんの卒業年度、第何回卒業生であるか。Q2-第1回卒業生2名のうち1人助手として学校に残っているが、その人の氏名。A1-不明、本学百年史編集資料、東光会より同窓会

報明治29年～を調べたが記載なし。A2一本書五十年史に渡辺里雨の記事から渡辺りゅうと思われる。以上2点朽木先生に回答。

6.23 ・中高部から段ボール(中)に資料届けられた。仕分け、ファイル。欠の部分が少しでも補充されるのはうれしいが、まだまだ欠が多い。・短大(英文科)卒斎藤玲子氏来室、創立当時のものと現在の短大同窓会関係の資料持参される。

6.30 ・斎藤玲子氏より「母の会だより」№45、46他の資料郵送あり。

7.7 ・小学部教科資料1987年度分チューブファイルに学年別教科別にファイルをした。5、6年と3、4年2冊にまとめる。

7.14 ・小学部教科資料1987年度1、2年教科別にファイル。・中高部の資料仕分及びファイル(未完)。・校外施設(野尻キャンプ)(軽井沢追分寮)ファイル(チューブ)。資料乏し。・卒業生大里時子さんから自身の記事コピーが送られてきた。

7.21 ・YMCA総務部主任新堀氏より問い合わせあり。Q-故A.R.ストーン夫人ミセス・ストーンとミス・ジーン・ギャレスピーが東洋英和女学校で教鞭をとられたことについて。A-履歴書及び退去届から、大正14.9.1来朝大正15.7.10退去、「史料室だより」№21 P.10、「クリスチャン・グラフ」1984年

2月号の内容を電話でお知らせした。

7.28 ・「東洋英和新聞」(中高生徒会新聞部発行)の綴じ、保管が悪いため破損が多く、補修し、クリップテープ、又は、ビニールパッチを一誌ずつ着けたため、非常に時間がかかり一日仕事となった。

9.22 ・保育部会の渋谷さんから、「師範科卒業生より、昭和8年頃からの英和の記念誌があるが差し上げてよい、との知らせが入ったが、どうしたらよいか。」との問い合わせ電話あり、史料室に入れていただくようお願いした。

10.6 ・静岡英和松縄善三郎氏よりミス・コーテスの履歴書依頼あり、コピーして送る。

10.20 ・段ボール入りの古い資料にかかる。かびで表紙、内の紙が変質、クリーナー、ダスキで掃除したが、余りにひどくて手のつけようもないものあり。しばらく風通しが先決。・日経婦人課石原氏より、J.エドワード・ガントレット夫人山田つね子さんについての問い合わせとガントレット氏の写真を求められたが、英和学校関係者であって東洋英和とは直接関係がなく、応えることができず。・五味さん(敬和会)より、ミセス・ヘニガーかミス・ヘニガー(百年史に記載)かの問い合わせあり、調べる。五味さんが在学中はミセスと思う。ミス・ハートの姉妹の妹さんがヘニガー夫人となったと思われる。(同窓会誌昭和7年度)

あとがき 戦時中の困難な時に若かった宮崎先生が、残された数少ない子ども達を大切に保育された様子に心を打たれました。又、平和な時代が再びもどってきて、乏しい中にも喜びを、苦しい中にも安らぎをおぼえるような英和の幼稚園をおもうと、今の満ち足りた時を大切にせねばという思いにかられます。宮崎先生の貴重な記録をまとめさせていただき、心から感謝の気持ちでいっぱいです。30年前の戦後教育改革期に、キリスト教教育を中心にすえながら幼児教育の先駆的実践に取り組まれた記録は、今日改めて新鮮な刺激を受ける思いがします。原稿をお寄せいただいた黒田先生に宮崎先生共々深く感謝いたします。

(小学部 木口、野田)